

《太陽の塔》の研究

—ミルチャ・エリアーデの影響—

佐々木秀憲（川崎市岡本太郎美術館）

1970年に大阪万博の為に制作された《太陽の塔》は、岡本太郎の作品中、最も著名である。岡本が同作品に込めた意図に関しては、いくつかの言説が提示されては来た。その事例を列挙すると、①「弥生的」VS「縄文的」説、②《太陽の塔》＝「縄文の土偶」説、③《太陽の塔》＝「アセファル（無頭人）」説、④《太陽の塔》と「仮面」説などである。これらは、客観的な根拠が不十分であり、思弁的ではあっても実証的であるとは言い難いのである。

その最大の原因は、戦前、パリ滞在中の岡本が接触したマルセル・モース(1872-1950)やジョルジュ・バタイユ(1897-1962)らに過度に拘泥し、岡本が第二次世界大戦後に修得した知識については考察されてこなかったことにある。

発表者は、2011年以降、岡本旧蔵の欧文書籍の中でもミルチャ・エリアーデ(1907-1986)の伝語初版本6冊を岡本が熟読していたことを突き止め、その影響関係を紹介してきた。《太陽の塔》もエリアーデの著作、特に『シャーマニズム』と『イメージとシンボル』の影響が確認できる。

1967年9月、岡本は大阪万博のテーマ展示の基本方針をまとめ、新聞各社の取材に対し、シンボルゾーンの屋上、その下の地上、地下の三層を貫く、人類の無限のエネルギーを象徴する高さ60メートルの塔を建造して、その名称が「(仮称)『生命の樹』」となることを述べている(同年9月17日付『神戸新聞』等)。この「生命の樹」の三層構造は、エリアーデの著書『シャーマニズム』や『イメージとシンボル』から着想を得ていることが、岡本旧蔵書の当該箇所に傍線が記されていることで明らかになった。《太陽の塔》はエリアーデの著書において北アジアのシャーマニズムとして言及されている「生命の樹」あるいは「シャーマンの木」から着想を得ているのである。さらに発表者は《太陽の塔》の原型制作過程を収めた写真アルバムに、秘書の平野(岡本)敏子によって「太陽の塔の装飾 別のプラン 生命の樹を象徴」とメモが記されていることを発見した。つまり、この塔は、当初の発表通り、「(仮称)生命の樹」として制作され、その基本モチーフは樹木だったのである。

《太陽の塔》内の、《生命の樹》と称されているアメーバから人類が誕生する進化の過程を表したオブジェは、通例「進化の系統樹」と呼ばれるべきものである。岡本旧蔵書の八杉龍一著『生物学』(光文社、1954年版)では、進化論の項に「系統樹」と記されており、「生命の樹」とは記されていないのである。つまり、《太陽の塔》とは、西洋近代合理主義の象徴である進化の「系統樹」を、形而上学的であるがゆえに非合理的な「生命の樹」が覆う、岡本がモースやエリアーデらの著作から獲得した宇宙観の表象なのである。本発表は、実証的な観点から、岡本太郎が《太陽の塔》に込めた意図について解明を試みるものである。